佐野まさの：活動と足跡

薗部　容子

はじめに

帯広および十勝地方の現代美術に大きな足跡を残し、現在もその影響の残る佐野まさのの生涯と活動、足跡を振り返る。現在、十勝は現代美術が盛んだと言われているが、その大きな要因として佐野の存在があった。彼の思想や活動が、現在の十勝における現代美術の多くを形作ったと言っても過言ではない。しかし、彼の業績を美術館が正面から取り上げたことはなかったし、美術史的に位置づけたこともなかった。それは、佐野の活動が美術だけに留まらず、文学や舞台、街づくり、アート・プロデュースやディレクションなど、多岐にわたることも原因のひとつであった。また、彼の作品、特に後半期の作品がインスタレーションを中心としており、残された作品が少ないということも原因にあった。それでも、彼の業績を改めて捉え直すことが必要と考え、本稿を記すものである。

佐野は自身に関する記事・資料をかなり詳細に保管していた。本人が晩年にまとめた『佐野まさの作品資料／平面1970-2003環境アート／感性の素描別紙』（未来筆道、2003年。以下、『佐野まさの作品資料』）は基礎的な資料となるものであるが、発表年・活動年に数字の間違いも見られ、会場名も違っている場合がある。この資料を元に、当時の展覧会の印刷物や新聞記事などでなるべく情報を補完していく必要がある。なお、出品した展覧会（特に1990年代後半以降）の名称に複数の表記が見られる場合、当時の資料を参照・勘案してメインの展覧会名と思われる表記を記している。ただしごく初期の活動や美術以外の活動（詩や舞台、街づくりの活動など）については資料が少なく、『佐野まさの作品資料』のみに基づく場合も多いことから、傍証不足の嫌いがあることは否めない。今後の課題としたい。

1．生い立ちから初期の活動まで

佐野まさのは1948（昭和23）年2月12日、音別町（現・釧路市）に生まれた。本名は雅之（まさゆき）。アーティスト名は、本名の漢字を読み換えたものである。父は書家の佐野象山で、主要な書道団体に属さずに独自の道を歩み、海外への書の普及にも努めた書家である。幼い頃から書が身近にあったことは、佐野の造形的な素養に一定の影響を与えたと言える[註1]。幼少期に帯広に移り、札幌の北海道デザイン研究所（現・北海道造形デザイン専門学校）で学んだ後、帯広に戻ってきた。

確認できる初期の制作活動は1966年、18歳の年に帯広ステーションデパートで行った「デッサンドローイング展」。1968年には、札幌のウエシマ喫茶ギャラリーで「デザイン・イラストレーション」展および「イラストレーション展」、同所でのグループ展にも参加している。1969年夏より、友人の与佐田清一郎と「日本一周スケッチ旅行」という名目の無銭旅行を実行。日本の民家、風景をスケッチしながら全国を放浪し、行く先々で絵を売る生活であった。沖縄には半年ほど滞在し（当時は米国統治下）、沖展にも出品。一年半におよぶ旅の途中（与佐田は半年ほど前に帯広に戻ってる）、東京銀座の路上で野外個展（図1）、石垣市の役場で石垣民家スケッチ展を行っている。また、東京で織田廣喜の作品をみて、影響を受けたと言う。

帰郷後の1971年、うけがわギャラリーで初の油絵個展「さのまさの展への招待」を開催。具象的でメランコリックな女性像を出品している（図2）。この時点で名前は既に「まさの」と名乗っている。なお、フリーデザイナー、グラフィック・デザイナーとして生活の糧を得ていた。その後も毎年市内で個展を開催。主に油彩によるもので、ピエロ（図3）や立棺（図4）、マッチ（図5）といった画題を、灰色を多用した暗い色調で描いている。はじめピエロや立棺をルオーを思わせる重厚なタッチで描き、やがて静物（図6）やマッチをどちらかというと薄塗りの洗練されたタッチで、時にデザイン的に描いている。ピエロをモティーフとしたのは、三岸好太郎が好きだったことも影響しているかもしれない。立棺は田村隆一の詩に深く感銘を受けて、棺というよりは人間存在を描いた一連の作品[註2]。立棺では、ジャコメッティ風の表現も見られる。マッチは、身近でありながら風土論に結び付くもの、同じマッチでも北国の北海道と沖縄や九州では違ったイメージを持つものとして、また、生活や社会に結びつく存在として、画題に取り上げている。

個展以外も活発な活動を展開した。1971年から「帯広アンデパンダン展」（～78年）およびグループ展「帯広1971年展」（「帯広1973年展」まで）に参加。いずれも公募展とは異なり、無審査でグループとしての結び付きは比較的ゆるやかな展覧会である。ゆるやかなつながりであったが、ここで知り合った米山将治らとともに休会していた帯広美術協会を1973年に再興したほか、百円デッサン会を発足した（いずれも～76年）。1975年には市内の若手作家5人によるグループ「ACH（アッハ）」、1977年には帯広デッサンクラブ（～79年）を結成している。

1979年、他地域とのつながりを持つ最初の展覧会を企画。帯広市民会館および旭川2ndロフトで開催された「80年へのメッセージ　'79→'80」展である。佐野は佐々木通修とともに開催に尽力した。この時点で既に佐野の口から「地方の時代」という言葉が出ているのが興味深い[註3]。ベニヤ板にアクリル絵具や油彩で描いた平面作品を出品している。

一方、文学との関わりも忘れてはならない。佐野は生涯を通じて、美術だけに留まらない活動を展開した作家である

が、文学はそうした活動の中でも初期から関わっていたものである。1968年、20歳頃に詩社「裸族」同人、1974年に詩誌「黒輝」の結成同人となっている。彼の美術作品も、文学的なタイトルを持つものが多い。この他、1975年に寺島春雄遺作展実行委員会、1978年にロートレック展実行委員会に参加するなど、活動を共にしない地元の美術界のメンバーともつながりを持つようになっていく。

2．1980年代～1990年代半ば：多面的・横断的な活動の本格化

1979（昭和54）年の「80年へのメッセージ　'79→'80」展の2年後、1981年に旭川での「TRANS MISSION ART NOW 発信」展に参加。1985年に帯広・北見・札幌・旭川で広域展開した「CIRCULATION'85」展、それ以来の札幌や旭川からの参加があった1992年の北網圏北見文化センターでの「北見現代美術展5」展、類似メンバーが集った1996年北海道立旭川美術館での「北海道アンデパンダンとその後の展開」展。この頃、佐野は定期的に旭川や北見、札幌の現代美術作家との展覧会に関わっている。はじめ旭川の作家とつながりができ、その後札幌や北見へと広がっていったもので、特に「CIRCULATION'85」はその後の影響の大きな展覧会であった。

こうした交流を通じて、佐野はそれまでの油彩画／平面作品から離れ、半立体作品やオブジェを手掛けるようになり、やがてインスタレーション作品へと、現代美術の作品制作に大きく舵を切ることになる。それまで帯広において、現在に続いていく「現代美術」の作品はほどんどなかった。旭川や札幌では、1970年代に一ノ戸ヨシノリや阿部典英らが現代美術作品を継続的に制作していたが、帯広においては散発的に見られる程度で、やや遅れた状況だったと言えよう。佐野は、他都市の作家の作品を目にして刺激を受けながら、「現代美術」の作品を作り始めた。

1981年の「発信」展に出品したインスタレーション作品（作品名不詳、図7）は、床面に置かれた白い木のステージの上に枠を設け、その中に木屑を敷きつめ、その枠の上に黒い木の柱を置いたもの。また、別作品になるようだが、そばの壁に白い生成りの布とその前面に白いパネルが設置されている。他に顔から型を取ったらしき樹脂製の顔像も出品している。作品名が不明なためもあり、表現の意図は残された写真からだけでは不詳である。この時点では佐野の作品も、個性の発露というよりもいまだ試みとしての域を出ていないと言えるかもしれない。しかし、この展覧会に出品した帯広のメンバーの中では突出して、それまでの作風から大きく変化させた現代美術の作品を出品している。その後佐野は、布や紙、塩、綿、ビデオアートなどを用いたインスタレーション作品（図8、9、10、11）のほか、金属板に機械の部品や流木と幾何学的な図形を組み合わせたレリーフ状の作品やオブジェ（図12、13）を制作するようになる。

1985年の「CIRCULATION'85」に出品した作品は、帯広百年記念館および北網圏北見文化センターで展示した《君のうなじからゆっくりとおちる水滴についての一考察》（図14）と帯広市中心部広小路での《視空間―都市の不機嫌に関して》（図15）。ほかに北見市公園通りでパフォーマンスも行っている。《君のうなじから・・・》は水、綿、ステンレス、木、鉄管、ワイヤー、ガラスを使った作品。綿は、90年代前半までの佐野のインスタレーション作品によく使われる素材である。有機的な素材を使い、他者の身体性への意識を感じさせる作品である。《視空間》は、キャベツをプリントした紙で石をくるみ、それを1200個も道路に置いたもの。街に展開する佐野の作品の初期にあたるものと言える。なお、後の2000年にも、キャベツを模したオブジェを街中に多数展示している（《野菜という場所・キャベツ畑》）。

1996年の「北海道アンデパンダンとその後の展開」に出品された《意識の装置≪意識のなかの自然≫》（図16）は、それまでの室内でのインスタレーション作品におけるひとつの精華と言える。腰の位置くらいに水平に設置された金属の枠の中に鉛色の金属があり、ところどころ裂け目が見える。周囲には石膏でできた緑色の半球型の物体がほぼ同じ高さに置かれ、半球の上面には機械の部品のような金属の円形の板が付けられている。6つの半球体が、四角い金属の枠を取り囲む。全体の印象は、きわめてシステマティックで無機的なものである。しかしよく見ると金属の裂け目や半球体の色むらなど、有機的な要素も含んでいる。色彩的には、彼の平面作品に通じる灰色や鈍色を主調とする。題名にあるように、人間の内面的な意識と、外的な自然とが並列的に認知され、作品はそれをつなぐ「装置」なのである。「装置」という単語を、佐野は自分の作品を語る際にしばしば口にしている。また「意識」という語も1970年代末からテーマとしており、80年代、90年代の個展タイトルや作品名には「意識の破片」「意識の装置」といった単語が繰り返し用いられている。

一方この頃、佐野は展覧会の企画だけでなく、人々が集う「場」を作ることも始めていた。1982年、街中のレンガ造りの倉庫に自由空間「洗濯船」を設立。名前はピカソやモディリアーニが集ったパリ・モンマルトルの集合アトリエに因んだもの。芝居好きの佐藤あや子や木彫作家の高橋英双、それに映画情報誌を発行する須藤芙美子、編集者の渡辺喜代美と立ち上げ、佐野が代表を務めた。メンバーは皆20代から30代の若さである。150人収容可能な舞台も作れるほか、舞台用照明や展覧会用パネルも備え、美術、演劇、音楽、映画、文学などを楽しむ場として、また文化教室の場として運営された。ここで佐野達自身の展覧会が開かれた他、名称通り自由に使える空間として種々様々な「文化のたまり場」となり、そこで人々の交流が生まれていった。当時の帯広で文化に興味のある人にとっては印象深い場所であったが、数年でその活動を終えている。1989年からは「文化の異業種交流」を目的とする「文化雑貨店」を発足し、事務局を務めている。これは詩

人の堀内靖夫らとともに始めたもので、月1回の例会は2年ほど続いた。誰でも1分40円を払えば詩、ビデオ、絵画、写真、書、音楽、パフォーマンスなど、何でも表現することができるものだった。

この他にも1980年、サックス奏者・高木元輝のコンサートにパフォーマンス共演（1986、95年には高木のコンサートやパフォーマンスを主催）、1981年、北の朗唱にて無言詩・詩態詩を発表、1983年には田中泯舞塾公演主催、1985年、「アパルトヘイト否！国際美術展」帯広展実行委員会事務局長、1988年、ダンス・パフォーマンス「白殺し」演出等を手掛け、1990年には安井賞展北海道実行委員会事務局次長（以後毎年）を務めている。また同年、北海造形研究所を発足し、緑ヶ丘美術館通りのプランを作成する他、1991年に「まちづくりグループ・プランAC」を結成。90年代に入るとギリヤーク尼ヶ崎の公演や霜田誠二のアートパフォーマンスを主催するほか、モダンダンス松本道子の公演にも美術や演出の面で関わっている（松本道子の活動にはその後も継続的に関わった）。また、1996年からインターネットを使って作品を発表しており、比較的早い時期からネット空間に意識的であった。

1980年代から90年代前半における美術以外の活動は、それ以前の文学の活動に加えて、舞台芸術との関わりがより深くなり、地元の劇団「帯広演劇研究会（現・劇団演研）」の劇場（演研芝居小屋）を会場に様々な舞台を主催するなどしたほか、90年代に入ってからは意識的に街作りの活動も始めている。なお、美術の仲間については、初期以来活動を共にすることの多かった与佐田清一郎、五十嵐深、佐々木通修、楢原忠司らが作家活動を止めたり帯広を離れたりしており、残ったのは米山将治や高橋英双など数は多くなかった。

1987年、「プランニングとかち」を設立。印刷物の編集デザインや企業PR、都市景観に関する企画などを手掛けていく。以後の環境アートの活動において、「プランニングとかち」としても仕事を引き受けるなど、アーティストとしての活動と「プランニングとかち」の活動とはつながっていたと言える。

総括すると、1980年から90年代前半、佐野は初期の平面作品から大きく作風を変化させ、さまざまな素材を駆使して半立体や立体の作品、あるいは空間的な広がりを有するインスタレーション作品を手掛けるようになった。インスタレーション作品は、後の作品に比べると小規模と言えるものだが、自身を見つめ、現代美術における自身に固有の表現を模索し制作していった時期である。帯広で「現代美術」が認知され始めた揺籃期と言えるだろう。これには、道内他都市との交流が影響を与えている。また、美術以外の文化的な場を設ける活動も活発かつ継続的に行っており、それに意識的な街作りが加わってきたのもこの時期であった。

3．1990年代後半以降：街へ、野外へ／街づくりと環境アート

〈1997～1999年〉

1990年代後半に入ると佐野は、1997（平成9）年に間伐材を使った「帯広の森アートキャンプ'97」（図17）、翌年に流木を素材にした「十勝の川　流木アートキャンプ'98」（図18）、翌々年から長期プロジェクト「サホロ湖環境アートの森1999-2001」（図19）を企画。これらは市民参加型の公開制作を行ったり、会場が帯広だけでなく音更町、幕別町、新得町など近隣の町に広がり、各行政機関も関わったりしたほか、関連展覧会が帯広市中心部で行われ、華道団体との連携やダンス・パフォーマンスも催されるなど、様々な面で拡張・多様化がなされた展覧会だった。単なる美術の展覧会に留まらず、人的な交流や環境への意識など、社会的な広がりを有していたのである。また1999年、帯広市中心部で「まちづくりと環境アート　おびひろストリートアート'99」、音更町十勝川温泉で「白鳥と流木と光のアート」（名称を若干変えながらも2001年まで続く）も行っている。佐野は「さまざまな場所で作品を創るということは、作家自身がその地域の自然や独自性、時代性を再認識していくことなのです。また、一緒に作業する住民自身も、自らの地域を再発見するきっかけになるはずです。[註4]」と考えていた。一方、1992年に帯広商工会議所メンバーが姉妹都市カッセルにおいてドクメンタを視察し、1996年に国際交流センター帯広（JICA）が開所するなど、国際現代アート展への開催に向けて市民の機運が高まる中、1997年に「とかちのアートを考える会」が発足し、佐野は会の主力メンバーとして、またアート・ディレクターとして手腕をいかんなく発揮していくことになる。

1990年代後半からの一連の展覧会の中で「サホロ湖環境アートの森」は当初、1999年から2001年までの3年間の長期プロジェクトとしてスタートした。環境という視点を通して、新得町サホロ湖とその周辺の自然や人々の暮らし、また十勝全体とも関わりながら、何を創るかではなく、何を見出し、何を育てるかに力点を置き、社会と自然環境を結びつけようというものだった。元々長期プロジェクトとして始められたものだが、更に期間を2005年まで延長。時間という要素を取り込み、表現の可能性を広げた。また、それまでの「帯広の森アートキャンプ'97」「十勝の川　流木アートキャンプ'98」が外部から大枠を決められていたのに対し、計画段階からより主体的に関わることができたプロジェクトで、その後の活動の幅広い展開にこの時の経験が活かされてくる。

彼は自身の作品を出品するだけでなく、展覧会コンセプトや各作家の作品に関してのディレクター的な働きや、企画を取りまとめ対外的な交渉を行い資金的な工面をするなどのプロデューサー的な役割を担った。展覧会に共通するのは、自然や環境に目を向け、作品が展示される「場」そのものや制作する過程（「サホロ湖環境アートの森」の際は展示後の過程も）を重視し、作者と鑑賞者、また制作や展覧会に関わった

人々との関わりから生まれるものをひとつの目的とする姿勢である。展覧会チラシには以下のようにある。「アース・ワークともランド・アートとも呼ばれているこうした美術の動向は自然の空間と制作する空間を一体化させていく作品として、それは見る側にとっても新たな場との関わり方を感得させるものであると言えます[註5]」。また、「将来的には世界各国から芸術家を集め実施するステップとなるよう、今回ぜひ成功させたい[註6]」と語っており、道内を中心に十勝以外の作家とのつながりを有していた佐野が、海外と十勝を結びつけることを意識し始めていたことが窺える。

越後妻有アートトリエンナーレ（2000年～）や瀬戸内国際芸術祭（2010年～）など、地方での国際芸術祭が活況を呈している現在ではごく当たり前になっているこうした姿勢を、それらに比べると小規模ながら地方都市の帯広で先駆的に試みていたと言える。

また、この頃から自分たちの作品を指して使い始めた「環境アート」という単語について、佐野は次のように語っている。「環境アートはさまざまなレベルで機能する、自然環境、都市環境、情報環境など環境アートに関しては空間と人間との関係におきかえることが可能だろう、すなわち場所（空間）というものがそれぞれ蓄積された歴史の層と風土性をもち、アーティストは素材（コンセプト）を土地から見いだし、その要因の内に作品化していく、野外での展示（インスタレーション）の作品にもその特徴が表われる、変化する気候や風土の中におかれた作品は、作品のもつ環境に対する敬意と人と動植物との脆い均衡の中にたもたれている生態系に対する関心、人間の合理的で物質主義的なものに対する精神的な価値に対する再生を促す、場所がわれわれの眼差しを自然へと導き、そのむこうに生命としての地平を把握させるように、想像力の眼を通して自然を解釈しなおす、それは美術館やアートギャラリーをおとずれることのない人々にもアートに対する新たな関心と関係を生じさせる[註7]」。「環境」という語を都市や情報まで含めた広い意味で捉え、そうした「場所」と素材に自分自身が対峙して作品を制作すること、また人との関わりも作品を作る上で重要な要素だということを改めて定義づけている。

1990年代後半におけるこれらのグループ展に出品された佐野の作品は、間伐材や流木などの自然の素材を使いながら荒々しさよりも洗練された造形感覚を有しており、それは初期の平面作品から一貫して感じられるものである。創作の起点はかなりコンセプチュアルなものであり、不可視のものや知覚し難いものを明晰に提示するひとつの“装置”として作品を考えている。コンセプチュアルなだけでなく造形的にも破綻なく作り上げているところに、作家としての力量を感じるとともに、残された写真は印刷物に用いることを充分に意識して撮影されたものが多く、デザインを仕事にしていたことやプロデューサーとしての働きを改めて感じさせる。

たとえば「サホロ湖環境アートの森」では、蓮台のように開いた形のさかさまにした流木の根の上に、板を幾何学的に組み合わせた球状の物体を設置した《大気の核は意識の胞子によって目を醒す》（図19）を制作している。そばの大きな石には、「天工は　自然が無意識に　営む技術。」の一文（図19-c）。構想の段階では球状の物体のみであったようだが、設置する場所に合わせて、そばの石も作品に取り入れたものだろう。自然物の有機的な要素だけでなく、整然とした幾何学的な要素を作品に取り入れ、自然の中に自然と共生するような人工物を置いている。そして、それを自然物同様、時間の経過にさらした。作品名からは、佐野が一貫して主要なテーマとしている「意識」が「大気」（自然）に働きかけるというコンセプトが窺える。

いつの頃からかは定かではないが佐野は「作品は残すものじゃない」と考えていた。その場所・その時にしか表現できない・感受できない作品を作り、物そのものが残ることは重視しない、という考えに至ったようである。

〈2000年以降〉

こうした流れを継いで2000（平成12）年からは「マチは美術館づくり事業」が始まる。帯広市中心部で「おびひろ都市環境アート　視覚のエレメント2000」（図20）、翌年に「視覚のエレメント2001」、「利別川アートワーク」、「新得町アートワーク」が開催された。そして2002年、帯広競馬場等で開催された「とかち国際現代アート展『デメーテル』」と連動した「とかち環境アート2002」（図21、22）が行われるのである。

「視覚のエレメント」では帯広市中心街の店舗や空き地、公園などを舞台として、作品の展示やワークショップ、パフォーマンスなどが時に祭りや商店街と連動しながら、市民参加を積極的に取り入れて展開された。更に、それ以前の「アートキャンプ」同様、近隣の町での展開も行っている。いずれも「環境」「現代アート」「十勝」をテーマとしたもので、事業名に謳っているように、十勝の活性化・街づくりにより焦点が当てられた活動であった。それ以前から佐野の関心は美術活動だけに留まらず広く「環境」や「地域」全体に及び、また、人と人との出会いや結び付きも活動のひとつの目的であると考えていた。そうした佐野の活動が結実したものと言える。

また、「デメーテル」が開催され「デメーテル」と連動したことは、佐野個人にとっても十勝の地域にとっても、大きな刺激を受けることとなった。「デメーテル」は帯広市開拓120年・帯広商工会議所創立80周年記念事業として、市や商工会議所のほか、十勝毎日新聞社が実行委員会を組織して開催された。ドイツのカッセルで行われる著名な国際美術展「ドクメンタ」のような展覧会を十勝でも開きたい、というところから出発している。帯広競馬場を主会場に、市内各所や近隣町村にも広域展開し、蔡國強やインゴ・ギュンター、オノ・ヨーコ、川俣正らが出品したほか、地元のアーティストも連動企画として作品を発表。現代美術において国際的に活躍する作家の作品が展示され、その運営に関わったことは、分野を横断し広域

的に活動してきた佐野にとっても、初めての経験だったと言えるだろう[註8]。東京主導の内容であることや、地元アーティストの参加が副次的になってしまったことへの忸怩たる思いはあったが、「デメーテル」が十勝にもたらしたもの、その後の十勝の現代美術への影響は多大なものだった。佐野は、「デメーテル」の第2回展を望んでいたが、果たされることはなかった。その後は、2003年に「とかち環境アート2003　十勝千年の森＝水脈の森・万象の微風」（図23）を開催している。

1999年以降の作品のうち、2000年まではそれまでの作風に連なるものだが、2001年になると生命や身体への意識が作品の中に現れてくる。直接的な形として表すわけではないが創作の出発点として、生命の根幹としての水や生命の起源である酸素などに着目して作品作りを行っている。たとえば人間の体内水分量と同じ塩分濃度の水を測定器に入れ、自然の風景の中に置いた《命の水プロジェクト》（2002年、図21）や、35億年前地球上に酸素を生み出したシアノバクテリアの記憶に触れる《呼吸のためのプロジェクト「酸素に触れる」》（2003年、図23）などである。またこれまでに比べて「環境」に対して、人間が一体化する対象として捉えているのも、変化のひとつである。これらには、自身の闘病も関わっていたものだろう。

なお、1990年代後半以降の美術以外での活動としては、YOSAKOIソーランの演出に熱心に関わったり、1999年から毎年、小磯良平大賞展北海道実行委員会の事務局次長を務めたり、2000年には「おびひろ夢あかりアートの街」実行委員会に参加したりしている他、それ以前から引き続き松本道子のダンスなど舞台とも関わり続けた。

〈「環境アート」まとめ〉

2002（平成14）年の「デメーテル」が終わった後、佐野に残された時間はそう多くはなかった。5年ほどの闘病生活において最後の1年近くは入院生活を余儀なくされている。入院直前まで松本道子のダンス・パフォーマンスに関わっていた。2005年8月11日永眠。美術の分野において最後の作品となったのは、2点の油彩である。下方に十勝らしき平原や山脈、中央には星空と月を背景に上空へとのぼっていく蝶あるいは魚が描かれている（図24、25）。作品名は《緑と水と大気・この風景には命がみえる・蝶》と《緑と水と大気・この風景には命がみえる・魚》[註9]。中札内北の大地ビエンナーレに出品するために描かれたものだった（出品したが、入選はしていない）。晩年の他の作品にも見られるように、作品名に「命」という単語が使われており、自身の命について思いを巡らせながら描いたものだろうか。また、自身の住む帯広・十勝、さらにはその「環境」にも思いを寄せたものだろうか。そしてその絵に描かれたのは、静かに美しく昇天していくかのような情景であった。

改めて1997年からの「環境アート」を振り返ると、当初「環境」が前面に出ていた活動は、やがて「地域」も前面に出てきたように思われる。問題意識は一貫していても、ある程度規模の大きな展覧会を継続的に開催する中で、街中の商店街や自治体・商工会議所、住民とのつながりが生まれ、「環境」への第一歩としての「地域」、またどんな活動をするにしても基盤となる「地域」の、その重要性が認識されていったことによるものだろう。

「環境アート」の活動は、佐野とその仲間が展開したものだった。行政の立場や事務的な面から関わった者、ワークショップ参加者も多数にのぼるが、創作活動を行った主要メンバーは以下。池田緑、梅田マサノリ、大沼秀行、鈴木隆、高橋英双、橋本勇、吉野隆幸、米山将治。他にダンス・パフォーマンスの松本道子。佐野はその中心であり、リーダー的存在だった。構想力とそれを実現する実行力、行政機関などとの調整能力、他者との関係性など、創作だけにとどまらない多面的な才能により、こうした規模の継続的な企画が実現したのである。多弁な訳ではなかったが佐野の意見は皆が耳を傾けたし、人懐こく人たらしな一面も持っていた。そうやって情熱的・精力的に活動を続けてきたのである。1980年代および90年代半ばまで、道内の他地域と交流を持ちいわば「ゲスト」としてグループ展に参加することはあった。しかし、「仲間」とともに明確なコンセプトを持った展覧会を「仕掛けて」いくようになったのは、90年代後半からだったのである。

1997年からの「アートキャンプ」、99年からの「サホロ湖環境アートの森」、2000年からの「マチは美術館づくり事業」、2002年の「デメーテル連動企画」など、名称とフィールドを変化させながらも一連の流れを持ったこれらの企画を振り返った佐野の言葉は次のようなものである。

「地元では現代アート、環境アートと言うよりも『流木アート』と言ったほうがなじみがあり、分かりやすいかもしれない。それほど流木や自然の素材を使った作品が多い、それはダムから出る流木や十勝川の河川敷から出る埋もれ木など、ランドアート、アースワークともいえる大きな作品をつくるのに適した巨大な素材が地元からごみ扱いされていたモノをアートという手法で活用してきたということがある。

それは素材を利用するということだけでなく、とかちの場所、森、河、平原、街など身近な自然や生活とアートがかかわることで見えてくる新しい発見、土地や人間とのつながりそれらがコンテンポラリー（同時代性）な状況と結びついていくことで、地域がなんであるか、地域が世界とどうつながっているかという手掛かりになる。コンテンポラリーは何も新しいということだけではない、今日的な状況は常に時代の現実を抱え、つながっているものであり、いわば運命共同体としての関係にある。だからこそアイデンティティーについても問題にされるのかもしれない。

地域が地域であるために、同時代として世界とつながっていくために必要ななにか、とかちという自然がそこに住む我々だけでなく、大きな視野でとらえる時、環境に対する意味もまた変わってくるのかもしれない[註10]」。

4．残された言葉から

佐野は、コンセプトや言葉の人であるとともに、視覚や身体にも意識的な人だった。規模の大きな展覧会を企画している時にはそうした面は前面には出てこなかったかもしれないが、初期の平面作品の頃から、一本の線、一個のオブジェの配置にも意を払っているし、舞台芸術に長年関わり続け、折々に自らパフォーマンスも行っている（図26）。

視覚について、2003（平成15）年に自らの足跡をまとめた冊子の中で次のように語っている。「・・・美術を始めた頃の一時期、視覚が研ぎすまされ、アートを通して世界のすべてを見通したいと願った事もあった。感性と哲学、時空をとらえるために必要な視覚、そんな想像力が働いていた。・・・[註11]」。

また、1981年の個展のタイトルでも使い、晩年に出版した素描集『感性の素描』（2003年）のタイトルでも使っている単語「感性」については以下のように述べている。「画家における基本はデッサン力やものを見る力と言われてきた、それが単に表現のための技術的な力だけでなく、画家の身体性そのものに関わるいわば感性を培うためのものである。創造を通して世界を捕らえる感覚、自己を通して人や生物としての営みや、時代や場の関係、純粋で何物にも妥協のない生き方こそ、アーティストの内に内包され、引き継がれてきたものである[註12]」。

ともあれ活動の多様さは驚くほどである。かつてのインタビューで、その多面ぶりを聞かれている。「・・・ところで佐野さんとはあちこちでお会いするが、造形物を作る人、ダンスをする人、企画を提案する人とその顔は実にさまざま。失礼にも『どれが本職ですか』とたずねたら『BODY（意識と体が一つになったもの）を使うという点ですべてが同じ』というような答えだった。・・・[註13]」。

おわりに

佐野まさのというアーティストの活動を、残された多くの資料を読みながらたどることは、ある種、人生をトレースするような感覚をもたらすものだった。初期から一貫して人と関わること、人と人との“場”を作り出すことに積極的・意識的であったが、そうした対外的な一面と同時に、内省的・思索的な一面も強かったように思われる。文学への関心もそうした一面に連なるものであっただろう。時に難解な作品のコンセプトについての文章や、環境アートについての文章、新聞記事での発言からもそれは感じられるし、感情を吐き出すというよりはむしろ、理知的に表現しようという作風からもそういった面を感じ取れる。

筆者自身は生前お会いすることはなかったが、死去して14年（2019年現在）、生きていれば71歳。後半期は年下の仲間との活動や後進との交流も多かったことから、現在でも彼をよく知る人は多数にのぼる。環境アートの活動を共にした仲間は「帯広圏現代アートパーティ」、「帯広コンテンポラリーアート」といった活動を展開し、より若い世代は「田園都市のコンテンポラリーアート　雪と風の器／緑と風の器」（佐野の命名による）などの展覧会を開催している。1980年時点で、絵画や彫刻などとは異なる立体やオブジェ、インスタレーションなどによる「現代美術」が浸透していなかった十勝に、その種を蒔き、育て、大きな幹を擁するまでにし、現在の盛んな活動につなげたのは、佐野の存在によるところが大きい。

註

1　佐野自身は、幼い頃に父親から書の指導を改まって受けたことはないと語っている。父親について多くを語ることはなかったが、尊敬していたようである。
2　「田村隆一の詩『立棺』はぼくに強烈な印象を与えてくれました。お棺のイメージはおよそなく、人間の存在感がよく表現されています。」（『十勝毎日新聞』1979年9月日付不明、1978年か）。「田村隆一の『立棺』の詩が頭にこびりつき、いつかこの詩をモチーフに絵をかきたい」（『北海タイムス』1979年9月18日）と考えていたという。
3　展覧会について問われた佐野は「今回の場合、状況も七十年最後の年ということや、“地方の時代”という認識もあってかなりみんなの中から意識の盛り上りがあった。」と語っている（「あたらしい美術状況の到来!!」『ふるさと十勝』1979年10月号）。またこの数年前に書かれた文章でも、「・・・私はみょうにこの東京風な空間に対する対抗心からか、地域性の独自な成熟という題目にこだわりつづけるようになってきた。」と述べている（佐野まさの「絵画的風土論の実験　あるいは意識の中で展開する風土」『十勝ジャーナル』、1976年8月号）。
4　「十勝っ子　現代アート作家　佐野まさのさん」『のびのび十勝』第19号、2001年8月。
5　「帯広の森アートキャンプ '97」チラシより。なお、環境アートの活動において、図録やチラシの文章で無記名のものは基本的に佐野によるものである。
6　『北海タイムス』1997年9月日付不明。
7　佐野まさの「視覚のエレメント2001」『市民文藝』第41号、2001年。
8　佐野は国際展開催について座談会で言及している。「『サホロ湖』のプロジェクトは、会期を当初の2002年から2005年まで延長しました。7年越しのアート展です。野外でこれだけ長期間継続するプロジェクトも珍しいのではないですか。それで、あの頃から、十勝でも国際規模の現代アート展をやりたい、と本気で考えるようになりました。やれるんではないかと・・・。」（座談会「とかちの環境アートをふりかえって」『マチは美術館づくり事業　とかち環境アート2002』マチは美術館づくり実行委員会・帯広市・新得町・本別町、2003年、17頁）
9　なお、1985年にも同じ画題の2作品を描いており、それらには《一万光年の旅・蝶》《一万光年の旅・魚》と作品名を付けている。
10　「『とかち環境アート』6年間の軌跡」『十勝毎日新聞』2003年2月26日。
11　『佐野まさの作品資料』。また、初期の個展の案内葉書には「絵画とは見ることであり　見るということは　思考することだと考えています」という言葉もある（1973年「さのまさの小品展」案内葉書より）。
12　佐野まさの『佐野まさの作品資料』チラシより。
13　「日曜インタビュー　佐野まさの氏」『十勝毎日新聞』1997年10月5日。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、ご協力賜りました皆様にこの場をかりて深く感謝申し上げます。

池田緑、梅田マサノリ、伽井丹彌、佐野ひとみ、高田佳子、寺嶋弘道、富田友夫、本田春行、松本道子、米山将治（五十音順、敬称略）

〈展覧会歴・活動歴〉

＊『佐野まさの作品資料』収載の「アート年譜」を元に、展覧会の案内葉書やチラシ、当時の新聞記事の記載などにより、情報の加筆や修正を行った。個展であることが分かりにくい展覧会名には「(個展)」を付し、開催地の分からない会場名は(　)内に都市名を補った。ギャラリー名の変更や併用が見られる「うけがわギャラリー」「うけか和ギャラリー」等については、案内葉書や当時の新聞記事に準じた。また『佐野まさの作品資料』のみに基づく情報は、展覧会名や会場名、内容等をアミカケで表記している。

■展覧会

年	月日	展覧会名	会場	出品作品(判明しているもののみ記載)	出品作家
1966		(個展)デッサンドローイング展	帯広ステーションデパート		
1968		(個展)デザイン・イラストレーション展	札幌ウエシマ喫茶ギャラリー		
		(個展)イラストレーション展	札幌ウエシマ喫茶ギャラリー		
		グループシーク展	札幌ウエシマ喫茶ギャラリー		
1969	10月	野外個展	銀座路上(東京都)		
		(個展)石垣民家スケッチ展	石垣役場		
1970	3月30日～4月2日	第22回沖展	那覇商業高校	《壺屋やね》(絵画)	
1971	3月30日～3月26日	さのまさの展への招待	うけがわギャラリー(帯広市)	《赤い蝶がなく》(油彩、30号F)ほか	
	8月10日～8月16日	帯広1971年展	うけか和ギャラリー(帯広市)		相沢貴、浅川茂、池田次男、伊藤凪子、佐野まさの、園部信二、豊田淑子、府川博幸、山口明雄、与佐田清一郎、米山将治
		帯広アンデパンダン展(～1978?)	市民会館(帯広市)		
		路上にてアクションペインティング	帯広駅前		
1972	5月21日～5月25日	帯広1972年展	うけか和ギャラリー(帯広市)		浅川茂、池田次男、伊藤凪子、上村武弘、大西勉、草森郁子、斉藤文子、佐野まさの、白畑伊都子、成田良弘、松永幸枝、松本すわえ、与佐田清一郎、米山将治
	～6月15日	帯広1972年展小品展	喫茶・川(帯広市)		浅川茂、池田次男、伊藤凪子、上村武弘、大西勉、草森郁子、斉藤文子、佐野まさの、白畑伊都子、成田良弘、松永幸枝、松本すわえ、与佐田清一郎、米山将治
	○月1日～○月末	油絵個展	画廊喫茶・丘	《女》《鎮魂歌》ほか、3号から15号までの油彩小品12点	
1973	4月11日～4月15日	タイムテーブルスタジオ展	うけかわ画廊(帯広市)	《燃える魚》《室内》または日本の民家スケッチ	
	5月15日～6月15日	さのまさの小品展	喫茶・川(帯広市)	《燃える魚》《室内》または日本の民家スケッチ	
		帯広美術協会展(～1976)	うけがわギャラリー(帯広市)		
		帯広1973年展	うけがわギャラリー(帯広市)		
1974	3月1日～3月31日	帯広美術協会小品展	喫茶・川(帯広市)		浅川茂、泉礼子、笠原憲、佐野まさの、杉本久直、米山将治
	～6月16日	さのまさの小品展	画廊喫茶ノアール(帯広市)	《花》(6号)《雪のふる日》(8号)《帽子の女》(6号)など人物・静物を中心に9点	
	8月14日～8月24日	佐野まさの、与佐田清一郎 十勝百景色紙展	弘文堂画廊(帯広市)	(水彩計31点)	佐野まさの、与佐田清一郎
	8月21日～8月25日	帯広美術協会展	うけがわギャラリー(帯広市)		泉礼子、今福宣之、笠原憲、佐野まさの、杉本久直、佐藤淑子
1975	1月2日～1月12日	第2回　佐野まさの、与佐田清一郎　十勝百景色紙展	弘文堂画廊(帯広市)	(水彩計51点、その内佐野30点)	佐野まさの、与佐田清一郎
	2月1日～2月10日	佐野まさの油絵個展「薔薇はなぜ美しくなかったか」	弘文堂画廊(帯広市)	《鳥の飛ぶ風景》(油彩、F10号)《部屋の中の裸婦》(10号)ほか裸婦10点、“扉”シリーズから《扉のある風景》(10号)《階段のある風景》《まど》、《星うらない》《少年ピエロ》(いずれもおそらく油彩)	
	3月20日～4月20日	帯広美術協会小品展	喫茶・川(帯広市)		
	7月1日～7月31日	帯広美術協会小品展	画廊喫茶ウィーン(帯広市)		
	10月5日～10月25日	佐野まさの素描展	画廊喫茶ノアール(帯広市)	素描の小品9点	
	11月5日～11月11日	帯広美術協会展	うけがわギャラリー(帯広市)		井上美恵子、今福宣之、笠原憲、佐野まさの、島田裕子、杉本久直、佐藤淑子、鳥倉礼子、中山美智子、矢野泰教
		(個展)ドローイング展	画廊喫茶ノアール(帯広市)		
1976	～6月19日	(個展)	画廊喫茶ノアール(帯広市)	(コラージュ)	
		(個展)	画廊喫茶ウィーン(帯広市)	《立棺》ほか(油彩)	
		百円デッサン会展	NHKギャラリー(帯広市)		
1977	7月18日～8月6日	さのまさの小品展	画廊喫茶ノアール(帯広市)	《ピエロのための習作》《イスとピエロ》や裸婦など4号～10号の10点	
	11月7日～12月6日	アート・スペース・アッハ展	ホビーアートスクール(札幌市)	《マチエルの箱》(120号)《マッチA》(F100号)《マッチB》(F120号)(いずれも油彩)、《マッチ》(立体)	佐々木通修、佐野まさの、林鬼好、松村嘉洋

年	月日	展覧会名	会場	出品作品（判明しているもののみ記載）	出品作家
1978	9月11日〜9月30日	さのまさの小品展「感性から存在へ」	画廊喫茶ノアール（帯広市）	《立棺》（田村隆一の詩から）6点、《かるちぇ・じゃぽね》（山本太郎の詩から）2点、裸婦2点。3号〜10号までの油彩半具象画小品計10点	
1979	9月3日〜9月9日、以降巡回	第23回シェル美術賞展	東京セントラル美術館ほか	《私の使った1本のマッチ》（F100号、油彩）	
	9月7日〜9月13日	佐野まさの油絵個展「私が使った1本のマッチ」	文秀堂画廊（帯広市）	《100本のマッチの中で最も美しい1本》（F100号）《私の使った1本のマッチ（燃やされた手紙）》（F100号）《私の使った1本のマッチ（凍て付いた雪路）》（F100号）《私の使った1本のマッチ（摺る）》（P100号）《私の使った1本のマッチ（マドとつらら）》（F100号）《マッチのためのエチュード》（F120号）《私の使った1本のマッチ（燃やされた手紙）》（F50号）《縄とケムリ》（P50号）《マッチ箱（A）》（F6号）《燃やされた手紙》（F10号）《捩れたマッチ》（F8号）《作品》（F10号）《冬の手袋》（F120号）油彩計13点	
	9月9日〜9月13日	80年へのメッセージ　'79→'80	帯広市民会館、旭川2ndロフト	《ビーナスの肺》《肺に関する未来へのテーゼ》（アクリル絵具、油彩、ベニヤ板）	五十嵐寛義、石橋学、岡田正樹、坂田雅義、佐々木通修、佐野機子、佐野まさの、高橋英双、滝上やすのぶ、富田友夫、松田功、村田生子ほか
1980	〜2月10日	佐野まさの油絵個展	弘文堂画廊（帯広市）	《星占い》（8号、油彩）ほか	
	（1981年1月8日〜1月17日）	第19回ホアン・ミロ国際ドローイング・デッサンコンクール（入選作国内展）	ホアン・ミロ財団会館（バルセロナ）（川上画廊、東京）	《踊るピエロ》（デッサン）	
		十勝の詩展「タイプライター」	帯広百年記念館		
1981	3月30日〜4月18日	佐野まさの小品展　感性から平面へ	画廊喫茶ノアール（帯広市）	《貝殻幻想》《白い断片》《平面A》《平面B》《平面C》《ブルーA》《ブルーB》《ブルーC》など油彩F3〜F10号まで計10点	
	7月28日〜8月2日	日本国際美術家協会展	千葉県立美術館（千葉市）		
	10月27日〜11月1日	美術雑貨店	うけか和ギャラリー（帯広市）		五十嵐深、小寺征子、佐々木ひとみ、佐々木通修、佐藤みどり、佐野まさの、高橋英双、千葉美恵、楢原忠司、林清、米山将治
	11月13日〜11月18日	TRANS MISSION ART NOW 発信	旭川西武amsホール	（インスタレーション、オブジェ計3点／かんなくずと床に敷いた上に柱を置いたもの、壁にかけた布とその前面のパネル、顔から型を取った樹脂）	荒井善則、五十嵐深、一ノ戸ヨシノリ、岡田徹、小島徹、佐々木通修、佐野まさの、末武英一、高橋英双、高柳和子、丹野利雄、鉄川厚史、楢原忠司、藤木正則、平間文子、マイク後藤、真鍋庵、山内孝夫、米山将治
		北海道平和美術展	市民会館（帯広市）		
1982		寺島春雄賞佳作受賞		《意識》（油彩、100号、1981年「帯広アンデパンダン展」出品作）	
		洗濯船オープン企画美術展	自由空間「洗濯船」（帯広市）		
		（個展）	自由空間「洗濯船」（帯広市）	《意識》（平面）	
1983	4月1日〜4月30日	佐野まさの油絵小品展	ミニレストラン幻想614	《夜と女》《“と”の関係》ほか人物を中心とした3〜30号の油彩小品計10点	
	11月8日〜11月13日	現代アート展　表出＝1983	帯広百年記念館	《“と”の関係―存在証明2－2》（コンクリートとロープの組み合わせによる造形）	五十嵐深、石橋学、梅田雅則、佐々木ひとみ、佐野まさの、鈴木隆、高橋英双、富田友夫、楢原北悠、橋本武、服部正、米山将治
		現代美術3人展	自由空間「洗濯船」（帯広市）		
1984	4月19日〜4月24日	佐野まさの個展	弘文堂画廊（帯広市）	（木の立体、オブジェ的なレリーフ小品数点）	
	6月25日〜6月29日	現代アート展　YUSO	洗濯船ギャラリー（帯広市）	《表面の質のちがいに視線をそそげ》（布や紙をたらしたインスタレーション、350×180cm）、金属によるオブジェ	
1985	8月16日〜9月22日	CIRCULATION'85	帯広百年記念館、北網圏北見文化センター（北見市）、マルサ（札幌市）、札幌市内各所、石狩浜、旭川市内各所、大雪山連峰〜十勝岳、帯広広小路、北見買物公園	《君のうなじからゆっくりとおちる水滴についての一考察》（帯広百年記念館、北網圏北見文化センター：水、綿、ステンレス、木、鉄管、ワイヤー、ガラス）《視空間―都市の不機嫌に関して》（8月25日、帯広タウン8広小路：キャベツ写植プリント1200個、紙、石、紙テープ）、パフォーマンス（9月22日、北見市公園通り）	（帯広）五十嵐深、梅田雅則、坂口寛敏、坂口友子、佐野まさの、鈴木隆、高橋英双、滝上やすのぶ、米山将治、（北見）阿諏訪政行、鈴木順三郎、石塚耕一、田丸忠、中村二二二、林弘堯、我妻英信、小川清人、数土浩行、（札幌）朝日紀行、太田美音、カート・ネベル、佐々木徹、佐藤整、末永英二、鈴木誠子、竹井由佳、中島洋、平井隆嗣、松田研、真鍋庵、山内孝夫、（旭川）荒井善則、一ノ戸ヨシノリ、岡田徹、マイク後藤、末武英一、はしもと努、藤井忠行、藤木正則
1986		（個展）	弘文堂画廊（帯広市）	《との関係》（インスタレーション）	
1988	7月7日〜7月12日	個展「意識の破片」	勝毎サロン（帯広市）	（平面、半立体、ビデオアート、インスタレーション）、《箱庭あるいは、集合的無意識》計6点（アルミ板に流木や歯車などの機械の部品。ピラミッド形の物体の周りの床に多数の円形を並べ箱庭療法を表現）	
	10月6日〜10月10日	'88「十勝の美術」	勝毎ホール（帯広市）	《静物と女》（油彩）	
		第1回弘文堂アート大賞受賞		《意識の破片》（インスタレーション、ビデオアート。勝毎サロンでの個展に出品したもの）	

年	月日	展覧会名	会場	出品作品（判明しているもののみ記載）	出品作家
1989	11月10日～11月19日	佐野まさの・米山将治ジョイント展「アートスーツ」	札幌アートプラザ	《意識の破片》シリーズ（鉄くずに真綿を張り巡らせたインスタレーション、半立体のレリーフ状の作品、《意識の破片（縄文）》）	
1990	3月26日～3月30日	第2回ロマンチック海道・体験の旅	近海郵船フェリー船内（釧路－東京）	《意識の破片》（立体造形パフォーマンス）	飯塚真規、石橋学、佐野まさの、高橋幸男、中西千尋、星川モトミ
	11月1日～11月6日	佐野まさの現代造形展「意識の破片（4）」	弘文堂画廊（帯広市）	（インスタレーション）	
1992	11月6日～11月11日	北見現代美術展5	北網圏北見文化センター（北見市）	《意識の破片》（くもの巣のような立体、150×150cm）	阿部典英、荒井善則、一ノ戸ヨシノリ、小川清人、佐野まさの、数土浩行、鈴木順三郎、田丸忠、部田淳一、中村二二二、林弘堯、藤木正則、米山将治、我妻英信
	11月26日～12月1日	佐野まさの個展	勝毎サロン（帯広市）	テーマは「意識の破片」：平面と立体4点（ピラミッド状の立体の周りに円形の立体、素材は鉄、ステンレスが主）	
		「意識の装置メモ」発表		（メールアート）	
1995	6月23日～7月5日	（個展）意識の装置	六花亭ギャラリー（帯広市）	《意識の装置》（ドローイング）ほか	
	11月2日～11月7日	（個展）意識の装置〈意識のなかの自然〉	弘文堂画廊（帯広市）	《意識のなかの自然》?（コンセプチャル・アート）2点	
1996	5月10日～5月19日	北海道アンデパンダンとその後の展開	北海道立旭川美術館	《意識の装置≪意識のなかの自然≫》（ミクストメディア　180.0×90.0×120.0cm）、アートパフォーマンス「イド」（5月19日）	
		「意識の装置・意識と自然」発表		（インターネット・コンセプトアート）	
		DNP AWARD '96	東京DNPパビリオン・インターネット		
1997	9月11日～9月24日	（個展）詩人の食卓	六花亭ギャラリー（帯広市）	（ボックスアートなど26点）	
	公開制作 10月10日～10月12日 展示期間 10月12日～11月9日	帯広の森アートキャンプ'97 アートワーク・風と森「森＝自然＝人間・帯広の森とアートとの共振！」	帯広の森	《時空の境界》（間伐材、枝、棕櫚縄、麻縄　40cm×6.5m　外形9m）	池田緑、梅田雅則、大沼秀行、佐野まさの、本田はるゆき
		詩と造形展	藤丸道新ギャラリー（帯広市）		
		弘文堂アート大賞10回記念展	弘文堂画廊（帯広市）		
1998	公開制作 8月3日～8月30日 展示期間 8月31日～9月30日	水・自然・人間＝河川と流木とアートの共振　十勝の川　流木アートキャンプ'98	札内川河川敷（幕別町）	《沈みゆく陽を視るための観測所》（埋もれ木、棕櫚縄、ボルト、ブロンズ液、ベニヤ板　22×8×高7m）	池田緑、梅田雅則、大沼秀行、佐野まさの、高橋英双、十勝文化会議華道部会、本田はるゆき、吉野隆幸、米山将治
	11月12日～11月25日	流木アートキャンプ'98作品展	北海道ホテル（帯広市）		池田緑、、梅田雅則、大沼秀行、佐野まさの、高橋英双、本田はるゆき、吉野隆幸、米山将治
		（個展）商工おびひろ表紙画展「十勝の詩景」	商工会議所（帯広市）		
1999	1月24日～2月28日	白鳥と流木と光のアート	十勝川温泉アクアパーク（音更町）	《北のダイヤグラム》（埋もれ木、麻縄、布シート、ベニヤ板、ボルト　15×15×高6.5m）	池田緑、梅田雅則、大沼秀行、OKADA Kiyoe、OKADA Ai、佐野まさの、TANIKAWA Noriko、橋本勇、助川かおる、MIURA Hiromi、吉野隆幸、米山将治
	8月26日～8月31日	流木アートキャンプ'99作品展	勝毎サロン（帯広市）	《植物という場所》	池田緑、梅田マサノリ、大沼秀行、佐野まさの、斉藤道子、高橋英双、戸張良彦、橋本勇、米山将治、吉野隆幸
	10月16日～11月30日	まちづくりと環境アート　おびひろストリートアート'99	平原通り商店街、NCビル（帯広市）	《球体のある枯山水》《鳥という場所（絶滅稀少鳥類図鑑より）》	池田緑、梅田マサノリ、プレスワーク、大沼秀行、佐野まさの、斉藤道子、高橋英双、橋本勇、助川かおる、米山将治、吉野隆幸
		第6回日本国際パフォーマンスアートフェスティバル（NIPAF）	キッド・アイラック・ホール（東京）	アート・パフォーマンス「イド・意識の装置」	
		詩と造形展	六花亭ギャラリー（帯広市）		
			NCビルウインドギャラリー（帯広市）	《意識の装置》	
1999～2005	（当初2001年までの予定を延長）	サホロ湖環境アートの森1999-2001	新得町佐幌ダム湖周辺地区	《大気の核は意識の胞子によって目を醒す》（ラワン材、ボルト、パームマット、樹皮）	池田緑、梅田マサノリ、大沼秀行、熊澤桂子、斉藤道子、佐野まさの、鈴木隆、高橋英双、橋本勇、吉野隆幸、米山将治
2000	1月23日～2月27日	白鳥と流木のアート	十勝川温泉アクアパーク（音更町）	《冬の流木舟》	池田緑、梅田マサノリ、大沼秀行、佐野まさの、橋本勇、吉野隆幸、米山将治
	8月8日～10月31日	マチは美術館づくり事業　おびひろ都市環境アート　視覚のエレメント2000	帯広市中心街	《根の国の系譜》《野菜という場所・キャベツ畑》《空のかたち》《アートワークのための筒》	池田緑、岩澤美香、梅田マサノリ、大沼秀行、カワシマトモエ、熊澤桂子、斉藤加江子、斉藤道子、佐野まさの、鈴木隆、高橋英双、谷口雅子、橋本勇、松本道子、吉野隆幸、米山将治
	10月19日～10月24日	「視覚のエレメント2000」作品展	勝毎サロン（帯広市）	《位置》	岩沢美香、池田緑、大沼秀行、熊澤桂子、斉藤道子、佐野まさの、橋本勇、吉野隆幸、米山将治
			新得駅前広場	《風の舟》	
		「十勝の詩景」	エバーハウス菜の花（帯広市）		

年	月日	展覧会名	会場	出品作品（判明しているもののみ記載）	出品作家
2000		私が造った現代アート展	ポポロビル２F・アートカフェ（帯広市）		
		街のアートをさがそう・アートを写そう	ポポロビル２F・アートカフェ（帯広市）		
		ものづくりワークショップ・キャベツ	ポポロビル２F・アートカフェ（帯広市）		
		おびひろ夢あかりアートの街	帯広市中心街		
2001	1月20日～2月25日	十勝川流木アート	十勝川温泉アクアパーク（音更町）	《月の舟、時の舟》	池田緑、梅田マサノリ、大沼秀行、佐野まさの、橋本勇、松本道子、吉野隆幸、米山将治
	8月8日～10月31日	マチは美術館づくり事業　おびひろ都市環境アート　視覚のエレメント2001	帯広市中心街	《生命の水プロジェクト》《根の国の記憶》	梅田マサノリ、大沼秀行、佐野まさの、鈴木隆、高橋英双、橋本勇、米山将治、吉野隆幸
	8月25日～9月30日	マチは美術館づくり事業　利別川アートワーク	本別町河川運動公園		梅田マサノリ、大沼秀行、佐野まさの、鈴木隆、高橋英双、橋本勇、米山将治、吉野隆幸
	10月1日～10月31日	マチは美術館づくり事業　新得町アートワーク	新得町役場前広場	《時空の境界》	梅田マサノリ、大沼秀行、佐野まさの、鈴木隆、高橋英双、橋本勇、米山将治、吉野隆幸
			十勝ビールウインドギャラリー（帯広市）	《意識の装置2001》	
			NCビルウインドギャラリー（帯広市）	《音（ネ）の国の記憶》	
2002	7月13日～9月23日	とかち現代国際アート展「デメーテル」連動企画〈マチは美術館づくり事業〉　とかち環境アート2002	緑ヶ丘公園（帯広市）	《命の水プロジェクト》《アニミズム》（鉄、麻縄、藁、縄、棕櫚縄など　2m×4点、2.5m×3点）	池田緑、梅田マサノリ、大沼秀行、佐野まさの、鈴木隆、高橋英双、橋本勇、米山将治、吉野隆幸
	7月13日～9月23日	マチは美術館づくり事業　新得町アートワーク	新得町役場前広場	《時空の境界》	梅田マサノリ、大沼秀行、佐野まさの、高橋英双、橋本勇、米山将治
	8月1日～8月31日	OBIHIRO CITY ART「ショー・ケース」	ホシビル（帯広市）	《命の水プロジェクト「水を汲む」》	岩沢美香、池田緑、梅田マサノリ、大沼秀行、小田徹、熊澤桂子、佐野まさの、鈴木隆、高橋英双、橋本勇、原田丕、望月厚介、山川千里、吉野隆幸、吉増剛造、米山将治
	8月23日～8月27日	とかち現代国際アート展「デメーテル」連動企画〈マチは美術館づくり事業〉　とかち環境アート2002	国際農業機械展会場（帯広市）	《ムスビ・縄文からの風》（埋もれ木、縄、石ほか　高さ8m×80cm×20m）	
2003	8月10日～10月30日	とかち環境アート2003　十勝千年の森＝水脈の森・万象の微風　「自然＝人間＝大地」	十勝千年の森（清水町）	《呼吸のためのプロジェクト「酸素に触れる」》	池田緑、佐野まさの、鈴木隆、高橋英双
	9月25日～9月30日	流動する形相-5つの場面展	勝毎サロン（帯広市）	《呼吸のためのプロジェクト―シアノバクテリアの記憶「酸素に触れる」》	池田緑、佐野まさの、鈴木隆、高橋英双、茶畑美智子
2004	3月5日～3月14日	感性の素描展	弘文堂画廊（帯広市）	20代に描いたクロッキーやエスキスなど（前年末にA２判の素描集『感性の素描』出版）	
	3月22日～4月14日	佐野まさの　油彩の時代	フローモーション（帯広市）		
	4月29日～5月24日	佐野まさの作業展　意識の破片の時代	フローモーション（帯広市）		
2004～2005	12月26日～1月30日	雪と風の器04-05	とかちプラザ南公園（帯広市）	《雪の核》	大沼秀行、佐野まさの、鈴木隆、高橋英双

■その他の活動、デザインの活動

年	月日	内容	備考
1968		詩社「裸族」同人	
1969夏～1970頃		一年半の間、日本の民家、風景をスケッチしながら全国を放浪	
1970		琉球焼の窯元、備前焼の窯元に滞在	
1973		帯広美術協会を再興（～1976）	
		百円デッサン会発足（～1976）	
1974		詩誌「黒輝」結成同人	
1975		グループ「ACH（アッハ）」結成	メンバー：佐々木通修、佐野まさの、林鬼好、松村嘉洋
		寺島春雄遺作展実行委員会	
		フランス、スペインに旅行	
1977		帯広デッサンクラブ結成、代表を務める（～1979）	
1978		ロートレック展実行委員会	
1979		シュールレアリズム映画上映会主催	会場：勤労者福祉センター（帯広市）
1980		高木元輝SOLO CONCERT　パフォーマンス共演	会場：大通茶館（帯広市）
1981		北の朗唱にて無言詩・詩態詩を発表	会場：大通茶館（帯広市）
1982	5月8日	自由空間「洗濯船」発足、代表を務める	メンバー：佐野まさの、佐藤あや子、高橋英双、須藤芙美子、渡辺喜代美
1983	6月14日、6月15日	松本道子創作舞踊「高野聖」出演・宣伝美術担当	会場：帯広市民会館
		ラリーハボルド現代美術公演会主催	会場：勤労者福祉センター（帯広市）　＊「公演会」ママ

年	月日	内容	備考
1983		田中泯舞塾公演主催	会場：音更町木野福祉センター
1984		大井こういち現代美術公演会主催	会場：帯広百年記念館　＊「公演会」ママ
1985		「アパルトヘイト否！国際美術展」帯広展実行委員会事務局長	会場：藤丸百貨店（帯広市）
1986	6月14日	松本道子モダンダンス「風の回廊」美術〔詩〕担当	会場：帯広市民会館
		小杉たけひさ、高木元輝ライブ主催	会場：ギャラリーしのかわ（帯広市）
1987	3月頃	プランニングとかち設立	メンバー：佐野まさの、松原良輝、梶山憲章
	6月13日、6月14日	松本道子モダンダンス「逢魔が刻の祀り」美術担当	会場：緑ヶ丘公園（帯広市）
1988	10月30日	パフォーマンス「夢の原像―白殺し」テキスト・演出・構成・美術担当	出演：高井あけみほか計3人（松本道子モダンダンス教室）、照明効果：長谷敏幸、美術効果：高橋英双　会場：ギャラリー陶（帯広市）
		北海道大学通信講座講師（帯広地区）	
1989	5月20日	「文化雑貨店」発足、事務局を務める	毎月一回例会、会場：主に画廊喫茶ウィーン（帯広市）
		北海道イラストレーターズクラブ	会場：トヨタギャラリー（帯広市）
1990	6月15日	松本道子「DANCE／おとさくところ」美術担当	会場：帯広市民文化ホール
	5月頃	北海道特殊造形研究所発足	緑ヶ丘美術館通りプラン作成　メンバー：佐野まさの、梅田雅則、本田春行、岡田耕一郎、高橋英双
		安井賞展北海道実行委員会事務局次長（以後毎年）	
		デザイン収穫祭　デザイナーズ協会展	会場：帯広百年記念館
1991	11月発行	『市民文藝』第31号（帯広市図書館）表紙原画制作	
		ギリヤーク尼ヶ崎帯広公演主催（～2001）	会場：グリーンパーク（帯広市）
		「詩の朗唱と造形」文化雑貨店主催	会場：画廊喫茶ウィーン（帯広市）
		まちづくりグループ「プランAC」結成	
1992	11月発行	『市民文藝』第32号（帯広市図書館）表紙デザイン作成（以降1993、1995～2001）	
1993	12月19日	パフォーマンス「かたち・かたり」出演	出演：伽井丹彌、窪田貴和子、大塚喜子、野原由美子、木本路子　会場：帯広市民文化ホール
1994	10月10日	松本道子モダンダンス「逝くものの・ゆらぎ」演出	会場：北海道立帯広美術館
		霜田誠二アートパフォーマンス'94主催	会場：演研芝居小屋（帯広市）
1995		COTOEN（十勝百科研究会）表紙原画	
		帯広夢あかりアートの森（プランAC主催、以後毎年）	
		霜田誠二アートパフォーマンス'95主催	会場：演研芝居小屋（帯広市）
		帯広デザインスクール講師（2年間）	
1996	3月16日、3月17日	松本道子「風の時感」美術担当	会場：コンカリーニョ（札幌市）
		竹の内淳「じねん」主催	会場：演研芝居小屋（帯広市）
		YOSAKOIソーランチーム「むらむらむらあず」演出	
1997		竹の内淳「じねん」音楽コラボレーション主催	会場：演研芝居小屋（帯広市）
		さよなら十勝大橋アートイベント企画（十勝大橋を考える会）	
		デザイナーズ協会展	会場：藤丸道新ギャラリー（帯広市）
1998		おびひろ音楽祭ポスター原画制作（六花亭）	
1999		小磯良平大賞展北海道実行委員会事務局次長（以後毎年）	
		三都市デザイン交流展	会場：不詳（旭川市）
2000		YOSAKOIソーランチーム「天真蘭舞」演出	
		第二札内橋検討委員会	会場：十勝支庁（帯広市）
		おびひろ夢あかりアートの街実行委員会	
2001		色彩広場イルミネーション（プランAC）	
2002	7月13日～9月23日	とかち現代国際アート展「デメーテル」インターゾーン企画・運営	
	8月18日	「デメーテル」連動企画　吉増剛造ポラロイドワークショップ主催	会場：「デメーテル」インターゾーン
2003	8月31日	茶畑美智子パフォーマンス・アート「呼吸する月・をめぐる風の織物（ウェーブ）」美術担当	《酸素に触れる》とのコラボレーション
	7月13日	デメーテル学校#007「呼吸のためのプロジェクト〈酸素に触れる〉コンセプト説明会」	会場：北海道立帯広美術館
	7月13日	シアノバクテリア自然観察	会場：足寄町オンネトー
	12月30日	『感性の素描』出版	A2判、エスキス、クロッキーなど50点
		短歌同人誌『辛夷』表紙原画	
		松本道子ソロダンス「みずひらく」舞台美術	
		OCTV 帯広シティーケーブルのスタジオ背景セット制作	
		平原のルキア「冬のルキア」あかりプラン作品制作	会場：色彩広場・多目的広場（帯広市）
		クンスト・ヘイゲン／とかちアート・フェスティバル実行委員長	
		帯広大谷短期大学・生活科学科公開講座「社会環境としての絵画」　講演「現代アート／幻想・環境・身体」	
2004	11月4日	十勝文化団体協議会　文化奨励賞受賞	
	11月7日	松本道子モダンダンス「草の片葉」俳句・詩担当	会場：大然寺（帯広市）

〈主要参考文献〉

- 佐野まさの「絵画的風土論の実験　あるいは意識の中で展開する風土」『十勝ジャーナル』、1976年8月号
- 「あたらしい美術状況の到来!!」『ふるさと十勝』1979年10月号
- 佐野まさの「地域的現実から新たなる空間（場）をもとめて・・・企画美術展『80年へのメッセージ79＝80』」『美術旭川』1979年11月1日第6号
- 『CIRCULATION'85　北海道広域現代美術展・資料』CIRCULATION'85実行委員会、1996年
- 末武英一編『北海道アンデパンダンとその後の展開』北海道アンデパンダンとその後の展開実行委員会、1996年
- 『帯広の森アートキャンプ'97』とかちアートキャンプ実行委員会、1997年
- 『十勝の川　流木アートキャンプ'98』十勝の川流木アートキャンプ'98実行委員会、1998年
- 佐野まさの「流木アートキャンプ'98」『市民文藝』第38号、1998年
- 「サホロ湖環境アートの森」『市民文藝』第39号、1999年
- 佐野まさの編『Tokachi Art Camp　白鳥と流木のアート』とかちアートキャンプ事務局、1999年頃（発行年不明）
- 「視覚のエレメント2000」『市民文藝』第40号、2000年
- 『マチは美術館づくり事業　おびひろ都市環境アート／視覚のエレメント2000　新得／サホロ湖環境アートの森　音更／十勝川流木アート』マチは美術館づくり実行委員会・帯広市・新得町・音更町、2001年
- 佐野まさの「視覚のエレメント2001」『市民文藝』第41号、2001年
- 「十勝っ子　現代アート作家　佐野まさのさん」『のびのび十勝』第19号、2001年8月
- 『マチは美術館づくり事業　おびひろ都市環境アート　視覚のエレメント2001』マチは美術館づくり実行委員会・帯広市・新得町・本別町、2002年
- 佐野まさの「国際現代アートと十勝のアート」『市民文藝』第42号、2002年
- 『マチは美術館づくり事業　十勝環境アート2002』マチは美術館づくり実行委員会・帯広市・新得町・本別町、2003年
- 佐野まさの『感性の素描』未来筆道、2003年
- 佐野まさの『佐野まさの作品資料／平面1970-2003環境アート／感性の素描別紙』、未来筆道、2003年

〈主要新聞記事〉

- 「絵画　原点からの表現」『北海タイムス』1971年7月7日
- 「シェル美術賞展　初出品・初入選」『十勝民報』1979年10月日付不明
- 「アトリエ訪問　佐野まさの氏」『十勝毎日新聞』1981年5月20日
- 「人　グループ族　佐野まさの」『北海道新聞』1982年8月21日夕刊
- 「土曜いんたびゅー　自由に交流　地方の利点生かせ」『北海道新聞』1989年6月10日夕刊
- 「青々広々　情報化時代の飢」『十勝毎日新聞』1995年12月19日
- 「日曜インタビュー　佐野まさの氏」『十勝毎日新聞』1997年10月5日
- 「文化とまちづくり」『十勝毎日新聞』1998年1月1日
- 「マチに溶け込み　マチを生かす現代アート」『十勝毎日新聞』2001年1月1日
- 「国際展と地域文化の新たな時代」『十勝毎日新聞』2002年9月28日
- 「『とかち環境アート』6年間の軌跡」『十勝毎日新聞』2003年2月26日
- 瀬尾明彦「さのまさの氏の放浪詩篇～三回忌を偲んで」『北海道新聞』2007年8月8日

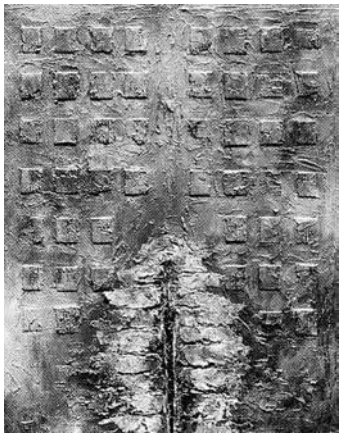
図版

佐野まさの　55歳頃

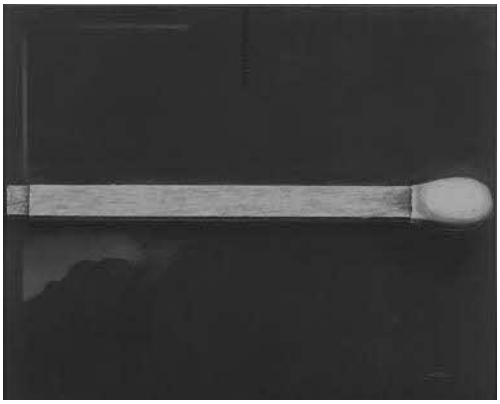
1

2

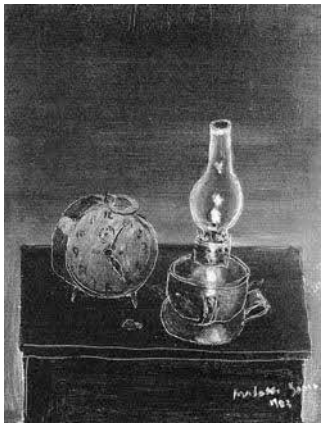
3



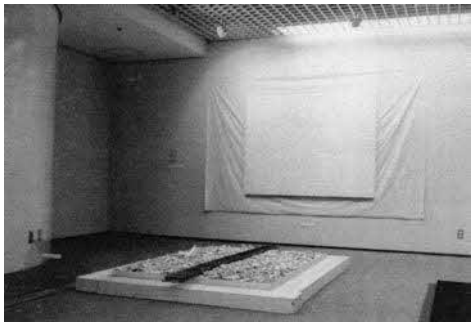
4



5



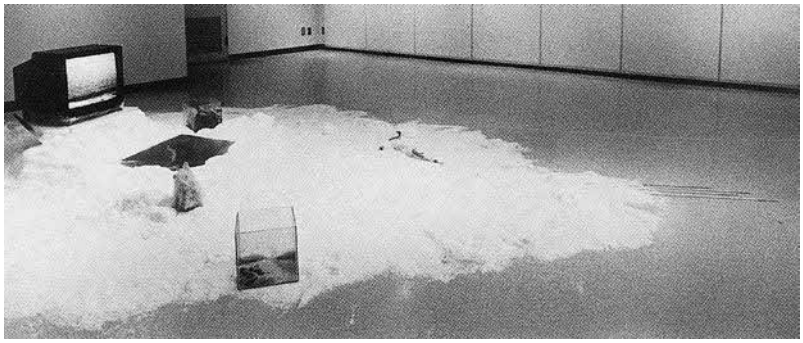
6



7

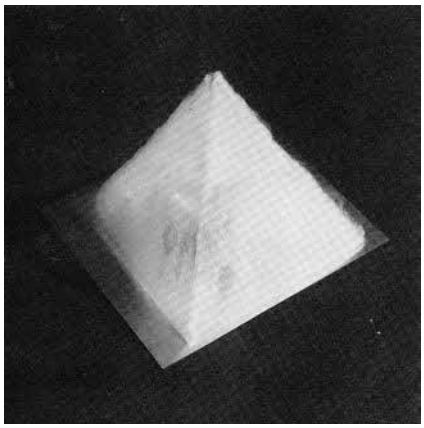
8

1　野外個展　東京銀座和光前　1969年10月
2　《赤い蝶がなく》　1971年　「さのまさの展への招待」展
3　《月とピエロ》　1976年
4　《立棺》　1980年
5　《100本のマッチの中で最も美しい1本》　1979年　「佐野まさの油絵個展『私が使った1本のマッチ』」展　北海道立帯広美術館蔵
6　《静物》　1983年　遺族蔵
7　作品名不詳　1981年　「TRANS MISSION ART NOW 発信」展会場風景
8　《表面の質のちがいに視線をそそげ》　1984年　「現代アート展　YUSO」

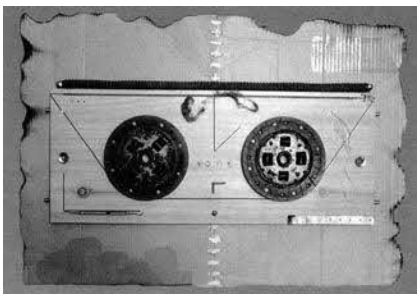


9

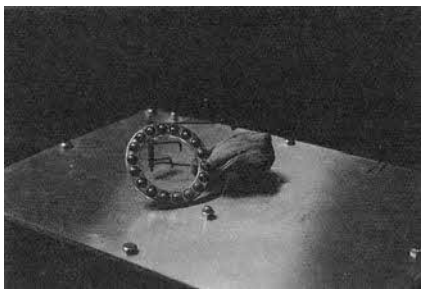
10



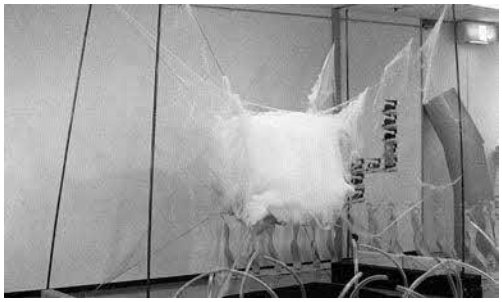
11



12



13

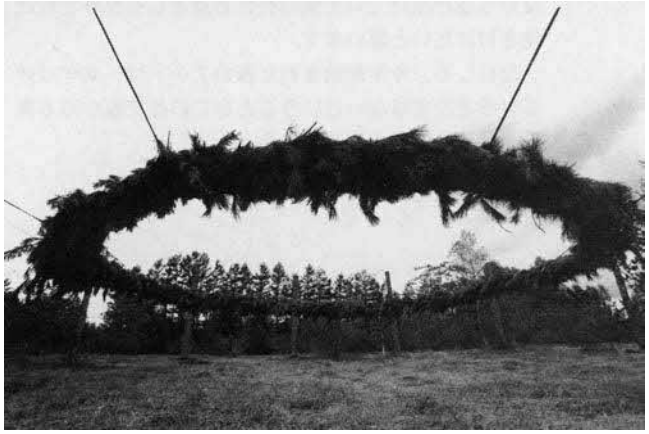


14

15

16

9 《意識の破片》 1988年　個展「意識の破片」会場風景
10 作品名不詳　1989年　「アートスーツ」会場風景
11 《意識の破片》 1990年
12 《との関係》 遺族蔵
13 《意識の破片》 1988年
14 《君のうなじからゆっくりとおちる水滴についての一考察》 1985年　「CIRCULATION'85」展
15 《視空間―都市の不機嫌に関して》 1985年　「CIRCULATION'85」展
16 《意識の装置≪意識のなかの自然≫》 1996年　「北海道アンデパンダンとその後の展開」展



17

18

19-a

19-b

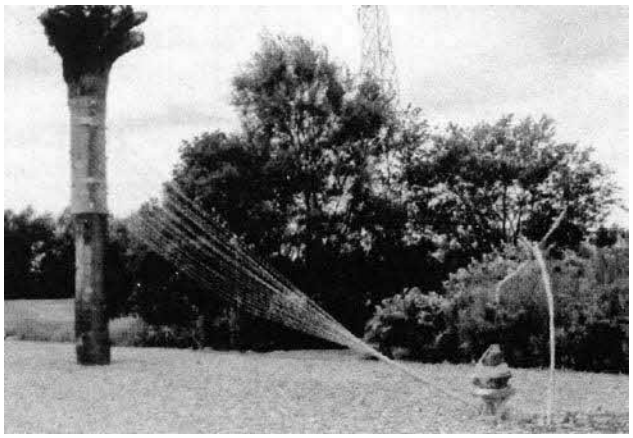
19-c

20

21

21（部分）

17 《時空の境界》 1997年 「帯広の森アートキャンプ '97」展
18 《沈みゆく陽を視るための観測所》 1998年 「十勝の川　流木アートキャンプ '98」展
19 《大気の核は意識の胞子によって目を醒す》 1999年 「サホロ湖環境アートの森 1999-2001」展
20 《根の国の系譜》 2000年 「都市環境アート　視覚のエレメント2000」展
21 《命の水プロジェクト》 2002年 「とかち環境アート2002」展

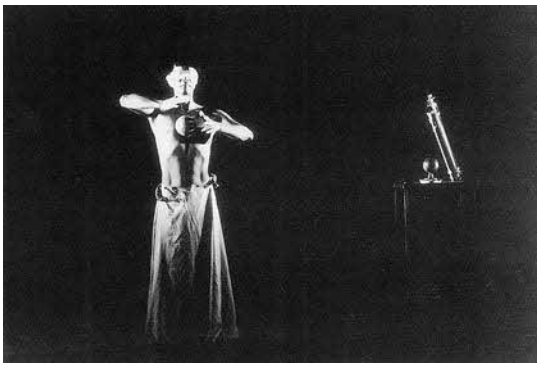


22

23

24

25



26

22 《ムスビ・縄文からの風》 2002年 「とかち環境アート2002」展
23 《呼吸のためのプロジェクト「酸素に触れる」》 2003年 「とかち環境アート2003 十勝千年の森＝水脈の水・万象の微風」展
24 《緑と水と大気・この風景には命がみえる・蝶》 2004年 遺族蔵
25 《緑と水と大気・この風景には命がみえる・魚》 2004年 遺族蔵
26 アートパフォーマンス「イド」 1996年 「北海道アンデパンダンとその後の展開」展

執筆者（五十音順）
井内佳津恵（北海道立函館美術館）
薗部　容子（北海道立帯広美術館）

査読協力者
池田　　緑氏（現代アート作家）
富田　友夫氏（情報誌編集長、佐野まさのの友人）
冨田　康子氏（横須賀美術館）
ラワンチャイクン寿子氏（福岡アジア美術館）

北海道立美術館・芸術館紀要 第29号 2019
Hokkaido Art Museum Studies No.29
ISSN 0915-8111

編集・発行
北海道立近代美術館
北海道立旭川美術館
北海道立函館美術館
北海道立帯広美術館
北海道立釧路芸術館
北海道立三岸好太郎美術館

2020年3月発行
印刷・デザイン：中西印刷株式会社